

**Nishida's *Auseinandersetzung* with Hegel's *Philosophy of Right*:**

**Infinity, Bottomless Time, the Historical World, and Ethical Life**

西田によるヘーゲルの『法哲学』との対決

無限・無底の時間・歴史的世界・人倫性

Steve Lofts (King's University College at Western)

要約

「歴史的世界に於ける個物の立場」(1938)とともに「絶対矛盾的自己同一」(1939)は、おそらく、成熟した西田哲学の本質的枠組を簡潔に述べる最重要テキストのひとつであろう。このテキスト全体を通して西田は自身の立場を明示するために繰り返しヘーゲルに言及しており、その言及の多くは『法哲学』に焦点を当てている。本論文は、ヘーゲルの『法哲学』との西田の対決 (*Auseinandersetzung*) という観点から、西田の『絶対矛盾的自己同一』を読み解くものである。

西洋の伝統では、時間、そしてそれゆえ歴史は、時間の外に立つ「永遠」を軸に理解される。たとえば、プラトンにとって、宇宙は「永遠を映す動く像」である。神もまた、世界時間の外に立つ無限かつ永遠なるものとして理解される。ヘーゲルにとってもまた、世界の歴史は無限という観点から理解される。けれども、ヘーゲルにとって、無限は必然的に矛盾を含むものである。なぜなら、無限は有限なもの、しがたって歴史を排除することができないからである。ヘーゲルの無限の捉え方は、究極的には歴史の終焉と有限な個別者の止揚へと導くことになる。歴史は、したがって、真の無限の歴史であって、無限な（終わりのない）

歴史ではない。ヘーゲルにとって、そうした終わりのない無限な世界の歴史は悪無限だということになる。しかし、西田にとっての無限あるいは絶対無は、ヘーゲルの絶対者とは違って、無限な「実体」を形作るものではない。西谷の言葉を借りるならば、有限は、真に無底の時間におかれる無限な有限性である。したがって、歴史は無限の歴史でありつづけるが、それは終わりのない無限な歴史である。ヘーゲルの『法哲学』との西田の対決 (*Auseinandersetzung*) は、無限および歴史的世界についてこうした別の見方をとることによって、個人的でありながら倫理的 (共同体的) でもある生 (人倫性 *Sittlichkeit*) の理解がどのように変わるかを示すこととなる。つまり、「絶対矛盾的自己同一」を通して語られる家族、市民社会、そして国家の理解が、である。

本論文は 1939 年の上記のテキストに見られる西田とヘーゲルとの対決 (*Auseinandersetzung*) に焦点を当てる。第一節では、西田の著作全体のなかでこのテキストを位置付ける。第二節では、西田とヘーゲルの歴史的世界についての説明を、歴史の超歴史的基礎についての両者の説明と関連させつつ、対照させる。第三節では、両者の相異なる立場が、倫理的生および世界における自由意志の存在についてのそれぞれの記述にいかなる結果をもたらしたのかに光を当てる。結論部においては、西田のヘーゲルとの対決 (*Auseinandersetzung*) が、西田の戦時中の政治的立場を理解する上での重要性について考える。